

スラバヤ国立大学による JF にほんご拠点事業国際セミナー 「東南アジアにおける中等日本語教育と教師養成」の実施

松本剛次

1. 背景・動機・目的：インドネシア及び世界での中等日本語教育の動き

インドネシアの中等教育では2004年に発表された普通高校・宗教高校カリキュラム以降、「能力を基盤とするカリキュラム」(Kurikulum Berbasis Kompetensi：以下「KBK」)という考え方が強く唱えられてきた。KBK とはその名の通り「能力 (コンピテンシー)」の習得に重点を置くものであり、ここでの能力とは「今日の国際化の時代の中で変化に応じて、人生の複雑さ、不確実さに対処できる技能や技術」(Sanjaya2008：80)と説明できる。日本語の授業ももちろんその例外ではなく、そこでは日本語の習得そのものに加え、日本語の学習を通しての「能力」の向上が目指されている。2013年にはこの KBK の考え方を更に前面に提示した新カリキュラムも発表され、現在インドネシアでは「生徒の能力の向上のための日本語教育」という観点からの授業研究や教師研修が積極的に進められている (松本2014)。

しかし、このような考え方は、何もインドネシアだけに見られるものではない。同じ東南アジアでは、フィリピンの「enTree」やタイの「こはる」という教科書の開発の背景にも同様の考え方が認められる (藤長・柳坪・三浦・大船2012など)。またオーストラリアでは、Intercultural Language Learning (文化間言語学習：以下「ILL」)をめぐると議論の中で同様のことが語られてきており (ジョナック・根岸・松本2008、トムソン2011など)、初中等教育段階の日本語教育ではむしろ現在の主流の考え方であると言える。しかし、この共通概念と目される考え方の各国での展開については、国・地域を越えての連携・情報交換はまだ十分とは言えない。それ以前にインドネシア国内での連携・情報交換もまだ不十分である。

本報告で扱う国際セミナーはそのような現状認識と問題意識の下、インドネシアにおける教育系大学の拠点の一つであるスラバヤ国立大学において2013年度の JF にほんご拠点事業 (通称「さくら中核事業」)として企画したものである。筆者も同大学所属の日本語上級専門家としてその企画運営に携わった。そこでは「日本語の学習を通しての「能力」の向上」「そのために教師及び教員養成機関に必要なこと、やるべきこと」という共通の関心事についてより掘り下げるべく、インドネシア国内、さらには東南アジア・オセアニア地域など近隣諸国間での情報交換と議論の場を国際セミナーという形で実現することを目指した。

2. 「場」としてのセミナーのデザイン

2.1 場づくりの「モデル」「枠組み」としての「拡張による学習」の考え方

本セミナーを企画し、実施するにあたり、その「モデル」「枠組み」として利用したのはエンゲストローム (1999) の「拡張による学習」の考え方、その中でも特に「相互作用しネットワークする活動システム」の考え方である。山住 (2004: 94) は「相互作用しネットワークする活動システム」について次のように説明している。

二つの活動システムが対象1から「対話」によって対象2へと拡張する。拡張をとおして、双方の対象は近づき部分的に重なり合うことになる。この境界を越えた対象の「交換」において、あたらしい対象3が立ち現れてくる。そしてこのような「第三の対象」は、新たな「変革の種子」(seed of transformation) を生みだしていく。つまり、新たに立ち現れてくる「第三の対象」がそれぞれの活動システムへフィードバックされることによって、もとの活動を変革していく原動力が生まれるのである。

ここに出てくる「対象」とはエンゲストロームの用語であるが、ここでは山住 (2004) に倣い「目的・動機」と捉えておく。本セミナーに参加するもののバックグラウンドは様々であり、それぞれの「活動システム」の影響下にある。この「活動システム」もエンゲストロームの用語であるが、ここでは山住 (2004) に倣い「集団的であり人工物 (ツールや記号、コンセプトやテクノロジー) に媒介され、対象 (目的・動機) に方向付けられたもの」と定義しておく。

例えば1章で述べたインドネシアの現在のカリキュラムの考え方である KBK やオーストラリア・ニュージーランドで唱えられている ILL などがその「活動システム」の例である。これらの「活動システム」は似ている部分はあるがそれぞれ違うものである。また、セミナーの参加者の中には KBK や ILL の活動システムを十分に理解し実践している人もいるし、そうではない人もいるであろう。同じ「活動システム」の影響下にあってもその理解の程度ややり方は人それぞれである。もちろんここで問題としたいのは何が正しいか、どれが正しいか、どうすれば正しいのか、という点ではない。大切なことは、セミナーに参加する人たちがそれぞれの「活動システム」を有しているからこそ、それらが「対話」を通して重なり合い「拡張」しうること、さらにはそこでの「交換」を通して「変革の種子」となりうる「第三の対象 (目的・動機)」を生み出しうるという点である。以上から、セミナーの中身を企画するにあたり「対話」「交換」「拡張」をキーワードと考えた。

2.2 セミナーの「デザイン (設計)」

2.2.1 公募発表、パネルディスカッション、基調講演

インドネシア全土から広く発表者を集めるいわゆる公募発表は当初から予定されていたが、

そこでも単なる「発表」の場に終わらず、全ての発表において発表を聞いた上で話し合い、対話にまで持っていくことが目指された。具体的にはインドネシアでは5-6名の発表者が登壇し、全ての発表が終わった後でまとめて質疑応答が行われるという形が多く、インドネシア日本語教育学会大会などでもそのようなやり方が採用されているが、今回は出来るだけ一つの発表が終わった後で質疑応答を行う、あるいは相互に関連したものであれば2-3の発表の後で質疑応答を行うという形とした。また、テーマ毎にブロック分けしたパラレルセッションの形で複数の発表を同時に違う会場で行うことにより、聴衆が自分の興味・関心のある発表のみを聞きに行けるようにし、発表後の質疑応答、話し合いも同じ問題意識のあるもの同士で比較的少人数でできるようにした。そして発表のテーマも後に述べる基調講演や「文法研究と日本語教育」のセッションを除いて、基本的に自身の授業等の実践に関するもの、つまりは実践発表とした。「実践」は言ってみればそれぞれの考え、それぞれが理解し、実践している「活動システム」を形にしたもので、それを発表するという事は「実践」を自分と他者が見えるようにすること、分かるようにするという事と考えたからである。

公募発表以外にはインドネシア国外、近隣諸国との情報交換と連携の観点から、各国の中等教育段階での日本語教育の現状を良く知る関係者による「パネルディスカッション」が企画された。これもその名の通り単なる発表ではなく「ディスカッション」であり「対話」である。そして本セミナー全体及びそれぞれのセッションの目的と方向性を示すべく、基調講演者2名に公募発表とパネルディスカッションに先立ち、話をしてもらうこととした。

2.2.2 「高校日本語教師のための特別ワークショップ」と「特別セッション：文法研究と日本語教育」

もう一つそれまでの公募発表やパネルディスカッションでの議論を現場の実践に落とすとともに、「対話」とその結果としての「変革の種子」という観点から企画されたのが、主に高校で日本語を教えている教師を対象とした ILL の体験型のワークショップであった。先に述べたように、現在インドネシアで強く唱えられている KBK の考え方と、オーストラリアで十年來唱えられている ILL の考え方には通じるものがあるがすべてが重なっているわけではない。そこで KBK についてはある程度は理解し実践もしているであろうインドネシア人高校日本語教師に ILL 型の活動を体験してもらうことで、「拡張による学習」的に言い換えれば「対象1」としての KBK がワークショップという対話をとおして ILL という「対象2」と重なり合い拡張することで、今後続く新しい何か（種子）が生まれることをも期待して、このワークショップを企画した。

一方、このワークショップと平行して、こちらは主に大学で教えている日本語教師を対象に「文法研究と日本語教育」という特別セッションも行うこととした。ワークショップへの参加

人数は限られてしまうという現実的な理由と、大学で教えている日本語教師には文法研究を専門としている者も多く、その発表の場もニーズとして高かったからである。

3. セミナーの実施

2013年12月20日、21日の二日間にわたり国際セミナー「東南アジアにおける中等日本語教育と教師研修」は行われた。以下に示すのがそのスケジュールである。

表1：セミナースケジュール

1日目：2013年12月20日（金）「インドネシアの中等教育の現状と課題」			
8:00-8:30	受付		
8:30-9:00	開会式		
9:00-9:45	基調講演① 「グローバル時代の日本語教育－日本語教師の役割を考える－」		
9:45-11:30	インドネシアの中等日本語教育の現状と課題－東ジャワ州での取り組みから		
9:46-10:30	インドネシアの中等教育政策と教師養成		
10:30-11:00	2013高校カリキュラムと日本語教育／教師養成		
11:00-11:30	東ジャワ州高校日本語教師会での取り組み		
11:30-13:00	昼食		
13:00-15:15	実践研究発表		
	教室1	教室2	教室3
13:00-14:15	「レッスン・スタディ」①	「クラス活動／ゲーム」①	「教材・メディア」①
14:15-15:30	「レッスン・スタディ」②	「クラス活動／ゲーム」②	「教材・メディア」②
15:30-16:00	休憩	休憩	休憩
16:00-17:30	「文字・表記」	「カリキュラム・教師養成」①	「カリキュラム・教師養成」②
2日目：2013年12月21日（土）「人間教育」としての中等日本語教育と東南アジア・オセアニアでの試み			
8:00-8:30	受付		
9:00-9:45	基調講演② 「21世紀に求められる人間像と日本語教育」		
9:45-13:00	パネルセッション「東南アジアにおける中等日本語教育と教師研修－人間教育の観点から」		
9:45-9:55	趣旨説明		
9:55-10:25	マレーシアの中等教育政策と日本語教育・教員養成		
10:25-10:55	タイの中等教育政策と日本語教育・教員養成		
10:55-11:15	休憩		
11:15-11:45	フィリピンの中教育政策と日本語教育・教員養成		
11:45-12:15	オーストラリアの中等教育政策と日本語教育・教員養成		
12:15-13:00	全体ディスカッション		

13:00-14:00	昼食	
14:00-16:30	教室 1 (大会場) 高校日本語教師対象ワークショップ	教室 2 特別講義 「文法研究と日本語教育」
16:30-17:00	閉会式	

セミナーには運営側（大学講師、職員や学生ボランティアなど）を除くとインドネシア内外から約150名もの参加者が集まり（インドネシア国内140名、国外10名）地方都市であるスラバヤで行われた日本語教育セミナーとしては過去最大規模のものとなった。以下セッションごとにそれがどのようなものであったか報告する。

3.1 基調講演①と東ジャワ州での取り組みの紹介（1日目午前）

初日午前には日本語教育学会前会長でもある名古屋外国語大学の尾崎明人教授による「グローバル時代の日本語教育－日本語教師の役割を考える」という基調講演があり、それに続き、インドネシアの中等教育の現状と新カリキュラムの説明、そして東ジャワ州では新カリキュラム導入にどのように対応しているのかについての発表が行われた。

尾崎教授の基調講演ではインドネシアでのここ10年の急激な日本語学習者数の増加の話から「なぜ第二外国語の教育が重要なのか」との問題提起があり、それに対して「複言語・複文化の人を育てること」「日本語でコミュニケーションができる人を育てること」の二つの目標が示された。また海外での日本語教育の課題として「英語以外の外国語との競争」「中等教育の学習者のモチベーションを上げること」が示された。いずれもインドネシアにも当てはまる課題である。そしてその上で私たちに出来ることとして「生徒の満足度、達成感を高めるべく教師としての教授能力を高める」ことと「日本語教師のネットワークづくり」が紹介された。本セミナーもそれを目指してのものであり、セミナー全体の方向を示してくださる講演であった。

これに続き、インドネシア内外での状況を踏まえた上で、現在どのような取り組みがインドネシア側で行われているのかについてスラバヤ国立大学外国語教育学科、前学科長のジョジョック教授と同大学日本語教育プログラム長のロニ氏、そして東ジャワ州高校日本語教師会会長のイマッド教諭から話があった。ジョジョック教授が国レベルでの教育方針を、ロニプログラム長が教育系大学としての取り組みを、そしてイマッド教諭が高校の現場での実態や取り組みを話すという構成で、とかく縦割りになりやすい組織間の壁を越えた連携、情報交換がこのセッションでは行われた⁽¹⁾。

3.2 実践研究発表パラレルセッション（1日目午後）

初日の午後にはパラレルセッションの形で計30の実践研究発表が行われた。インドネシアで

「実践研究発表」という形でこれだけの規模のものが行われるのは今回が初めてのことであった。発表者はインドネシア全土から集まり、2.2.1で述べたように発表自体よりもその後の対話を重視した構成であったため、質疑応答も非常に活発に行われた⁽²⁾。

実践発表は大きく「レッスン・スタディ」「クラス活動／ゲーム」「教材／メディア」「文字・表記」「カリキュラム・教師養成」というカテゴリーに分かれて行われた。このカテゴリーは主催者側が最初から決めていたものではなく、送られてきた発表内容をもとに後からカテゴリー分けしたものである。中でも「レッスン・スタディ」「クラス活動／ゲーム」「教材／メディア」に該当する発表が多かった。現在インドネシアでは「レッスン・スタディ」という形での授業研究や「クラスルーム・アクション・リサーチ」と呼ばれる実践研究が強く推奨されており、それが反映された結果であると考えられる。これらの教師自身が行う実践的な研究は既に教師の間でも身近なものとなってきていると言えよう。しかしそれに引き換え、その発表の機会は少なく、さらにはそれを元に話し合いを重ねるといような場はまだまだ少ない。すべての発表者から意見が聞けたわけではないが、主催者側が話を聞いた範囲では発表者は皆、今回のセッションには充実感を感じており、今後もこのような機会があることを強く望んでいた。

3.3 基調講演②とパネルセッション：「東南アジアにおける中等日本語教育と教師研修 —人間教育の観点から」（2日目午前）

2日目午前には国際交流基金日本語国際センターの中野佳代子参与から「21世紀に求められる人間像と日本語教育」という基調講演があり、それを受ける形でマレーシア・タイ・フィリピン・オーストラリアからの代表者が各国の中等日本語教育の現状と課題について発表し、最後に全体での討議が行われた⁽³⁾。

中野参与の基調講演では「21世紀に求められる人間像とは」というテーマの下、OECDが提唱している「キー・コンピテンシー」の考え方にはじまり、同様の考え方はヨーロッパや欧米、そしてアジアでも現在唱えられていることが紹介された。そしてその上で「中等教育における外国語教育の目標と使命」について、個人の目標としては21世紀を生き抜く力を外国語教育を通して身につける必要があること、社会の目標としては多言語多文化のグローバル社会を構築していくことが示された。

これに続き各国での現状と課題の紹介が行われたが、ここで確認できたのは、それぞれの事情や特徴はあるが各国とも「人間教育」「能力（コンピテンシー）の育成」という学校教育、中等教育全体の目標の中に「日本語教育」も位置づけられており、そのための方法が探求されている、そしてその考え方も基本的には共通しているという点であった。全体討議の時間では、今後、アクション・リサーチ、レッスン・スタディに代表されるような実践研究が共有されることで国内外の連携につながっていくであろう、という期待も示された。

3.4 高校日本語教師のためのワークショップと特別講義「文法研究と日本語教育」

2日目午後には2.2.2で述べたようにそれまで議論を現場での実践に落とすとともに今後続く「何か」が生まれることを期待してのワークショップが行われ、高校の教師を中心に約70名が参加した。西オーストラリア州教育省の藤光由子氏を講師として招き、現地で実際に行われている「お弁当」をテーマとした ILL 型の活動が展開された。日本の「おべんとう」という考え方・コンセプトを理解してから、自分たちの地域の名産品や食文化、さらには栄養バランスや彩りまで考えて、自分たちでオリジナルのお弁当を考え、それを発表し、お互いに評価し合う、という活動であった。このような科目横断型、統合型の授業はインドネシアでもそれが提唱されているにも関わらず、まだ十分には実施されていないものである。現職の教師である参加者達が、実際に学習者としてそれを体験することができたという点で非常に意味のあることであった。参加した教師達はみなこの一連の活動を非常に楽しんでいて、今後続く「何か」が生まれれば、というのもここでの狙いであったが、まだ、その「何か」は意識化され、言語化されてはいないものかもしれない。しかし参加した教師達からは何らかの「手応え」を感じとれた様子や声が窺えた。

一方、ワークショップに並行して行われた特別講義「文法研究と日本語教育」には大学の教員を中心に約40名の参加があった。名古屋大学准教授宮地朝子氏による講義の後、インドネシア側からの4名の発表者が研究発表を行った。本セミナーはタイトルにあるように「中等教育」を中心としたものであるが、インドネシアで国際セミナーを行う場合、大学で教えている教員からの参加ニーズが高い。そのニーズへの配慮のためにもこのような特別枠は必要である。事実参加人数も予想より多く、参加者からの評価も非常に高いものであった。

4. 振り返りと評価、今後の課題

上述のように、情報交換と議論の場という目的をある程度は達成できたという点で今回のセミナーは成功であったと言える。インドネシアを含む東南アジア、オセアニアの中等日本語教育で、今なにが唱えられ、どのような実践が行われているのか、互いに知ることが出来たのは大きな収穫であった。そしてこれが真の目的であったのだが、単に「知る」だけではなく、「対話」を通してそれぞれの考えを深めること、「拡張による学習」論的に言えば「対話」を通してそれぞれが持っている「活動システム」を重ね合わせ「拡張」することも、ある程度はできたと言えよう。まだ言語化されるような形で「芽」こそ出ていないものの、「変革の種子」となりうる動機、きっかけは、生み出せたであろう。問題は今後いかにしてその「種子」を育てていくか、その「種子」を更に増やしていくかである。

これについてはやはり今後もこのような「場」を作っていくこと、そしてそれを継続的、連続的に続けていくことで意識化、言語化のための振り返りの機会を提供していくことが重要で

あろう。また、それぞれの「場」をつないでいくには、それぞれの「場」のデザインが目に見えるようになっている必要がある。例えば本報告に先立つものとして中島 (2014) による全豪日本語教育シンポジウムの報告があるが、その中で中島は「初中等段階における日本語教育先進国であるオーストラリアでのこの試みを、広く世界の日本語教育関係者と共有すること」をその報告執筆の目的とし、「本シンポジウムが一度きりの打ち上げ花火となってしまうように、いかに継続性をもって運営していくか」を今後の課題としている。本報告は、同様の目的と問題意識を持って、新たな展開へとつなぐべく、「場」のデザインを目に見える形で示したものである。今後、本報告につながるさらなる報告が増えていくことを強く期待している。

〔注〕

- ^① インドネシア、東ジャワ州での近年の動向についての詳細は松本 (2014) を参照されたい。
^② 要旨の査読を行った結果全ての発表が発表に値するものであると判断され、また広く発表と対話の場を提供するという本セミナーの目的から、今回は応募したものの全員に発表の機会が与えられた。
^③ 各国からの発表者は以下の通りである。

タイ：Noppawan Boonsom (国際交流基金バンコク日本文化センター専任講師)

フィリピン：Florinda Amparo A.Palma Gil (国際交流基金マニラ日本文化センター専任講師)

マレーシア：Mohd Ghazali Taib (Institut Pendidikan Guru Kampus Bahasa Antaragangsa)

オーストラリア：Cathy Jonak (国際交流基金シドニー日本文化センター専任講師)

〔参考文献〕

- ジョナックキャシー・根岸ウッド日実子・松本剛次 (2008) 「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの日本語教育支援—Intercultural Language Teaching and Learning の考え方を中心に—」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号、115-130、国際交流基金
- トムソン木下千尋 (2011) 「Intercultural language Learning (文化間言語学習) が目指す学習者が育成していくべき日本語能力」『早稲田日本語教育学』第8号、121-128、早稲田大学
- 中島豊 (2014) 「第1回全豪日本語教育シンポジウムの報告」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、145-152、国際交流基金
- 藤長かおる・柳坪幸佳・三浦多佳史・大船ちさと (2012) 「アジアの中等教育における日本語教育の現状と展望—韓国, 中国, タイ, フィリピン, マレーシアの事例をめぐって—」『日本語教育国際研究大会名古屋2012予稿集第2分冊』、74-75、日本語教育学会
- 松本剛次 (2014) 「インドネシアの中等教育改革が目指す「能力 (コンピテンシー)」とその育成」『日本語教育』158号、97-111、日本語教育学会
- 山住勝広 (2004) 『活動理論と教育実践の想像 拡張的学習へ』関西大学出版部
- ユーリア・エンゲストローム (1999) 『拡張による学習 活動理論からのアプローチ』新曜社
- H.Wina Sanjaya. (2008) *Perencanaan dan Desain Sistem Pembelajaran*. Kencana Prenada Media Group.